

2017年版のあとがき

先頃の米国大統領選挙のさなか、私は日米の友人知人に、支持だと言って大いに聲援を買っていたのだが、その心はつまり、候補が大統領になってわが国に対してむちゃくちゃな要求をしてくれたら、さしもの政府・外務省も堪忍袋の緒が切れて、敗戦後七十余年にしてついにわが国が真の独立を果たす、ということを期待してのことだった。しかし、予想外に実際に当選してみると、先方の自宅まで世界の先陣を切って駆けつけるなど、なんだか骨の髄まで染み込んだ植民地根性を確認するだけで終わってしまいそうな気配である。よもや、どんなお土産を持って行くのか考えるのが外交係の仕事だと心得ているのではなからうと願いたい、どうだろう。

それにしても、もう一つの予想外の事件であった英国のヨーロッパ連合からの離脱とともに、社会の分断が全世界的に感じさせられる昨今である。

私とその英国に初めて渡ったのは、米国・フランス・イタリアに行ったあとだったので、ケンブリッジ大学に三週間滞在し、週末ごとにロンドンも巡ったそのときの第一印象は、「ヨーロッパの辺境にあるアメリカによく似た国¹⁾だなあ」というものだった。ロンドンは都会だが、東京ほど便利ではないし、パリほど簡単にうまいものにありつけるわけでもないし、ローマのような遺跡もないし、要するに歴史順にローマ帝国から見たら辺境の田舎なのである。大英博物館で膨大なコレクションを入場無料で見られるのは素晴らしいけれど、よくよく見たら、いずれも外地からの戦利品がほとんどであり、彼の地の土着の文化の貧困をいっそう際立てるものであるともいえよう。

しかし——ニュートンそしてファラデーやマクスウェルを生んだのも、産業革命を世界で初めて起こしたのもイギリスである。世界に冠たる大英帝国の維持発展に、こうした世界に先駆けた学術と技術の進歩が一定の役割を果たしたことは確かであろう。

ひるがえって東洋に目を転じると、やはり古代文明は中国から始まったことは疑いない。これを中心に見ると、日本はアジアの最果てにある小国だということになる。そう、ローマ帝国から見た英国と、中国文明から見た日本はよく似た立ち位置にあり、その歴史的発展も途中までは似通った点があった。

周知の通り、明治維新が起こったのは1868年である。殖産興業を目指して世界遺産富岡製糸場ができたのは、明治5年、1873年のことだった。わずか5年で、とよく言われるが、しかし明治元年は9月に始まったので、実際にはほぼ4年で、お雇い外国人の任用や場所決めから、当時としては世界随一の大工場の建設までをやったのけてしまったのである。

私の所属する日本物理学会の前身、東京数学会社が設立されたのは、明治10年、1877年のことだった。これを欧米の諸学会と比べて見ると、英国の王立協会は1660年、英国物理学会は1874年、ドイツ物理学会の前身であるベルリン物理学会は1845年、現在世界一の科学大国にある米国物理学会ができたのは1899年である。すなわち、日本物理学会は欧米の諸学会に負けない伝統を持っているのである²⁾。

このことからわかるように、日本は産業革命に伴う近代化の最後のバスに間に合ったのである。そのうえ、欧州では純粋学問と神学の殿堂であると見なされていた大学に工学部を作る、という大発明をやったのけた。

こうして、時宜を得たことと当初の政策が正しかったおかげで、わが国は東洋にあって唯一、早くから近代化を成し遂げることに成功したのだが、英国と異なる運命を辿ることになったのは、その後国策を過ち、出口のない無謀な戦争に打って出、一敗地に塗れてからのことである。

私たちが敗戦国に暮らす以上、物理学の研究発表をする際にも英語で行わなければならないのは仕方ないにしても、母国がいつかは真の独立を回復してほしいと思うし、何より国内外の多くの犠牲の結果実現した平和主義を貫くべきことを改めて確認したい。

2017年1月

横山順一

1) もちろんアメリカがイギリスに似ているのであって、逆ではないことは頭ではわかっていたが。ちなみに北京にはじめて行った時には、香港とアメリカを足したようなところだなあと思った。私の感性はその程度である。

2) 東京数学会社は主として江戸時代の和算の伝統の下に設立されたので、物理学者としては必ずしも自慢できることではないが。